

令和2年度第1回高砂市総合教育会議 会議録

令和2年8月27日(木)高砂市総合教育会議を高砂市役所分庁舎1階大会議室1において開会

出席委員

市長	都倉	達殊
教育長	衣笠	好一
委員	山名	克典
委員	吉田	美香
委員	神尾	信作
委員	布施	隆志

出席事務局職員

企画総務部長	永井	幹雄
企画総務部参事	麻	敏浩
企画総務部総務室長	荻野	章広
企画総務部経営企画室長	前田	育司
企画総務部経営企画室公共施設等総合管理計画担当参事	松本	匡茂
企画総務部経営企画室公共施設等総合管理計画担当主幹	古賀	裕規
企画総務部総務室総務課長	樽家	正治

教育部長	永安	正彦
教育部教育推進室長	阿部	伸也
教育部学校教育室長	赤松	祐人
教育部教育推進室教育総務課長	北野	昌代
教育部教育推進室生涯学習課長	中野	照久
教育部学校教育室学務課長	高橋	千春
教育部学校教育室学校教育課長	矢野	仁之
教育部学校教育室学校教育課情報教育推進・地域とともにある学校づくり担当主幹	横山	善彦

傍聴者

3名

本日の議事

- (1) 高砂市の教育行政について
- (2) 組織改正について
- (3) 青年の家を含む向島公園の活用について
- (4) その他

○事務局

それでは定刻となりましたので、これより令和2年度第1回高砂市総合教育会議を開会いたします。

まず最初に、市長から御挨拶をお願いいたします。

○都倉達殊市長

4月13日に市長を拝命させていただきました、都倉でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

座ってしゃべらせていただきます。

本日はこの高砂市の総合教育会議につきましては、本当に私、初めての経験でございますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。この会議は、市長と教育委員の皆様方と公の場で教育行政について真剣に議論をすることで、高砂市の教育政策の方向性を共有し、ともに進めていくことのできる大事な会議であると考えております。本日、開催をお願いしましたところ、委員の皆様方には大変お忙しい中、お集まりをいただきまして誠にありがとうございます。

また、改めて委員の皆様方には、平素から高砂市の教育行政、あるいは高砂市の子供の健やかな成長に御尽力を賜っておりますことも重ねてお礼を申し上げます。

本日は、まず前半は高砂市の教育行政全般について議論をしていきたいと思っております。また、来年度に市として検討しております組織改正においても、この中で教育部の組織の考え方などについて説明をさせていただきます。皆様方には忌憚のない御意見を言っていただきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

私自身もこの高砂市で生まれ育ちまして、家のほうが事業を行っているものですから、ある時期は市外のほうへ大学、また社会人として出ておりました。その後、30歳で高砂市に戻ってまいりまして、子供たち3人おりますけど、高砂市の小中、また高校は私学でしたけどPTA会長もさせていただきました。そういう経験の中でやはり教育の現場のことも少なからず分かっているつもりではおりますが、時代の変化の中で今の子供たちが感じている教育現場とは多分かけ離れたものだと思っております。数年前まではゆとり教育という国の施策もありましたし、最近においてはGIGAスクール構想ということで大変大きく変化もしてきております。そういう中で、やはり教育を預かる教職員の方々、また保護者の方々、そういう方々とのいろいろなやはり環境についての意識の共有と、また子供たちのこれからやはり進むべき方向性、そういったものについてもやはり健やかに育っていただきたいと私自身も考えておりました、これからのやはりスピードのある社会、そういう中で持ちこたえられるような、やはり子供たちを育てていく環境を高砂市としても進めていきたいと考えているところでございます。私は教育長にもお願いしておりました、1コマでも教育の現場で市長として対話をしたいというお話もさせていただいております。それは何かと申しますと、やはりふるさと高砂、このここで生まれ育った子供たちが離れていっても、やはり高砂市に帰ってきたいなというやはり思いを心に刻んで社会に出てほしいという気持ちでおります。私が市長を目指したのも、やはりこの高砂ふるさとを何とかしたいという志を持って市長選挙に臨みました。そういう中においては、いろいろな社会に出ていく上においては、いろいろなやはり子供の時代からそういうことを目的として持てなくても、やはりいろいろな教育の中でそういう節が一つ、二つとあれば、また成長の過程になろうかと思っております。

そういったことで、高砂市の教育の将来、やはり勉強だけではなく、市の歴史であるとか文化、そういったものも含めて、やはり子供たちに学んでいただきたいなという思いでございますので、委員の皆様方におかれましては、またこれからの高砂市の教育の将来に向けていろいろな御意見をいただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いお

願い申し上げまして、簡単ではございますけど、御挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

○事務局

ありがとうございました。

今回は、都倉市長の就任後、初めての総合教育会議となりますので、改めて総合教育会議の構成員の皆さんを御紹介させていただきます。

まずは、先ほど御挨拶をいただきました、都倉市長です。

○都倉達殊市長

どうぞよろしくお願い申し上げます。

○事務局

続きまして、衣笠教育長です。

○衣笠好一教育長

よろしくお願い致します。衣笠です。

○事務局

続きまして、山名委員です。

○山名克典教育委員

山名です。よろしくお願い致します。

○事務局

続きまして、吉田委員です。

○吉田美香教育委員

吉田です。よろしくお願いいたします。

○事務局

続きまして、神尾委員です。

○神尾信作教育委員

神尾です。よろしくお願いいたします。

○事務局

続きまして、布施委員です。

○布施隆志教育委員

布施です。よろしくお願い致します。

○事務局

以上が、総合教育会議の構成員の皆様となります。本日は、全ての構成員の皆様に御出席いただいております。なお、事務局の出席者の紹介につきましては、出席者名簿をもってかえさせていただきます。

それでは、これから議事に入らせていただきます。

本日は、高砂市の教育行政について、組織改正について及び、青年の家を含む向島公園の活用についてを議題とさせていただきます。

高砂市総合教育会議運営要領第4条の規定により、市長が議事進行を行うこととなっておりますので、これからの進行は市長をお願いいたします。

よろしく申し上げます。

○都倉達殊市長

それでは、総合教育会議、ただいまより議事に入りたいと思っております。

それでは、私のほうで進行させていただきますので、御協力をよろしくお願い申し上げます。

まず、議事の第1番目、高砂市の教育行政についてでございますけれども、まず、教育委員の方々から高砂市教育大綱の概要について説明をさせていただきたいと思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。

それでは、教育部長。

○永安正彦教育部長

教育部長でございます。

それでは、資料1ページをお願いいたします。

高砂市教育大綱をお示ししております。この教育大綱につきましては、令和2年2月でございますけれども、前回の総合教育会議におきまして教育大綱として御承認をいただいたものでございます。内容につきましては、そのときに詳しく御説明させていただきましたが、これにつきましては第3期の高砂市教育振興基本計画をもとにしておりまして、これにつきましては令和2年4月1日から新しい5カ年の計画となっておりますが、その教育目標や施策の方針を大綱として決めておるところでございます。この教育大綱につきましては、高砂市におけるものとなりますので、新たに都倉市長にも、承認をいただき、引き続きこの教育大綱をもとに高砂市の教育行政を進めていくというところで、今回お示しさせていただきます。

簡単ですが、説明は以上でございます。

○都倉達殊市長

ありがとうございました。

それでは、まず、高砂市の教育大綱の概要について説明をいただきましたが、私が高砂市の教育行政を進めていく中で一番重要だと考えておりますのは、この中で基本方針にありますように、また、先ほどの挨拶の中でも触れましたけど、この「ふるさと高砂を愛し、思いやりとたくましさに満ちあふれた人づくり」というところについて、やはり私は重要だと考えておりまして、このあたりについてまた委員の皆様方からも御意見を伺いたいと思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。

○山名克典教育委員

何をしゃべればいいのかということですが、この大綱に関しまして、それとその大綱の中にいろいろ書いてある中、自分なりに思っていることで今、市長が言われたこと、「ふるさと高砂を愛し、思いやりとたくましさに満ちあふれた人づくり」ということで、これが最初に基本方針なんですけど、その中で今、3歳児教育というのが今言われてきて、実際、高砂市も3歳児教育をいろいろやっているんですけども、その3歳児教育は何で大事であるかという僕なりに解釈している部分をちょっと突然なので、系統立てて

ちょっとしゃべりにくいからばらばらでしゃべるかもわかりませんが聞いていただきたいのは、いわゆる子供の脳の発達そのものに関しては、やっぱり生まれてからやはり1歳、2歳、3歳と進んでいくうちに、やっぱり脳の発達そのものからいわゆる子供が例えば顔を見るとか、あるいはそれから人のまねをするとか、あるいは言葉を出して親とのやりとりをするとか、そういう形でしてきたときに、大体2歳ぐらいからもうほとんどできてきて、3歳ぐらいにはもうほとんど脳の発達ができる。そのときまでに結局その人の形成というか、教育というよりも人を形成するに当たって、人と人との話をし、その人格形成、あるいはその経験とか人となりを作り上げるのはやっぱりその時代から物事が、人格形成とか経験を積んで、体験と積んでいって人間としてこの発育とか発達というのが出てくると思うのです。だから、そのときにやっぱりその親との接し方、あるいはその周りの人との環境とか社会とか、そういうところでその子、いわゆる一人の子供を育てていこうという、地域の中で育てていく。そういうことから始まっていって初めて結局、そういう環境の中、教育の中でそれがいわゆる3歳児教育があって、それで幼稚園教育があって、それで就学してからの教育があって、そんないろいろな流れの中で一貫した人間形成を進めていって、結局その子供自体に人とそれぞれのケース・バイ・ケースというよりも、人となりの一人一人の教育のパターンを、その子に合った教育の環境づくり、教育をしていくという形、人に合った教育をしていく。そういうのがどンドンどンドンそこからずっと進んでいく。大きな筋としてね。それで初めて、結局その中で子供がそこでやられた体験とか、お母さんからの愛情の問題とか、地域の人たちに見守られた感覚、あるいは社会の中で結局その子が受けた、いわゆる思った感覚、そういうのがやっぱりこの高砂の町がいいという意識が自然と育つと思う。だから、ふるさとを愛せと言ったってなかなかない。結局それは小さいときからそういう幼児教育とか、自分で意識を持ちだしたときから自分の育った環境が高砂であって、そのときの周りの人たち、家族を含めて周りの人たちみんながその子に対して愛を注ぐ。そうしたときにやはりその環境はすばらしい。そしたら結局人を愛することもできるし、その地域を愛することもできる。そういう大きな理念のもとで地域を愛するような形の子供、人を愛せるようなことも結局教育で育てていこうという、それからの教育が始まっていくという、そういう流れがあって、だから、ふるさとを愛するような形を作るのは、中学校になってから愛せよ、ふるさとを楽しみどうのこうの言ったってならないので、もとの結局生まれ育ったところから進んでいくんだという。一応、さわりはそういうことだと思うので、幼児教育の重要性とか、それとあとの一貫した教育の流れで、実際にはその子を育てるにはやっぱり継続、その子その子に応じた人となりの教育の仕方のもを、教育委員会としては結局、高砂については提供してあげてサポートしてあげて、その子の能力を伸ばせるような形があれば理想としてあり得るのかなという形でざっくりと言いますので、あとは皆さんで。さわりは言いましたけど、いいですか。

○都倉達殊市長

今、山名委員から幼児教育についてお話がありましたので、ちょっと教育長のほうから現場のほうの。

○衣笠好一教育長

山名委員おっしゃるとおりで、今、市長もよく以前からおっしゃっていたのは小中一貫教育大事ですよ。教育に推進してくださいという思いを聞いたことがあるのですけども、そんな中で高砂市としては、やっぱり一貫した、今、山名先生おっしゃった一貫した人間形成ということを見ると、やっぱり小中一貫教育やっていますが、そのベ-

スになる幼児教育ですね。この0・1・2・3・4・5歳、3歳も大事だというお話ありましたが、そういったことをきっちりベースにしてその幼児教育と幼児教育のところの部分できっちりと強化な連携をして、その上に今度一貫教育という形で今進めているところです。やっぱり山名委員さんおっしゃったように、「ふるさと高砂を愛し」というのは、やっぱり市長おっしゃったように文化とか歴史とかを学ぶ中で学ぶ。高砂が大好きになるということも大事ですし、この高砂という地でその地域の方々にも見守られた、家族とともに過ごした、先生にこんな言葉がけをしてもらったということがあって、何か自分がそんなんになったり、青少年期の時期に挫折しそうになったり悩んだり困ったときに、こんなふうに教えてもらったとか、こんなふうなこともあったとかという経験も含めて、それが困難を乗り越える支えになるような力として身についた上で、ふるさと高砂、高砂ねという思いが出てくれば、もうそれがすごいいい形で子供たちに反映した形で出てこれるんじゃないかということで、今、市長がおっしゃったのは一貫教育もそうですし、その今言った幼児教育、それにつながる就学前の教育、それから就学後の小学校、中学校、または高等学校につながる教育というのをやっぱり大切にしながら今、取り組んでいるところです。

○都倉達殊市長

ほかの委員の方で、今の関連で何かございましたら。

○吉田美香教育委員

今、山名委員さんおっしゃったように、脳の発達という意味では、人間の脳の全ての能力をコントロールするという大事な部分、人格形成をする前頭前野というところが成長するのは3歳、10歳、この2回、非常に急激に成長するというデータが出ています。ですから、やっぱり3歳児教育というのは個人差はありますが、2歳になったり4歳になったりしますが、その幼児教育というのを絶対に大事に考えないと、小中というのに意味がなくなってしまうということで、やはり3歳児教育、就学前教育ですね。保育というのは、やっぱりきちんと充実したものを全ての市内の子供が平等に受けられるということがまず大切なことじゃないかなと思いますし、それから今たくさんの子が高砂市で教育を受けて巣立っていくのですけれども、帰ってきてくれるかなということや、帰ってきて私に思っていて、市長さんもそのような思いを持たれているということをお聞きしてすごくうれしかったのですけれども、私たちが子育てをするとき、どこで子育てするかというのはいろいろな地域に仲間がいて話をしたときに、やっぱり自分がいい思いをしたところへ帰るのですね。ということはやっぱり、子供のときにいい思いをしていないと帰ってこないのだなという、大切にされたとか、そういう思いってすごく大事なのだなというのを感じまして、どの子供も認められたいし、たくさんの人に愛されたいしという思いを強く持っていますから、一人きりで泣いているような子供を絶対作らないような、そういう子に対してすごく社会が家庭のような感じで、ふるさとに帰るような思いを高砂に持ってもらえるようにいっぱいいろいろな人に関わっていただけるような行政の在り方というのですか。教育現場だけじゃなくて、地域や行政の方たちいっぱいの人一人一人に関わっていきけるというような形を作っていただくと、子供は自分大切にされているという意識を持つと思うのですね。そこのところをぜひともお願いしたいと思っております。

それと、文化に対してなのですが、割とその伝統文化というのと新しい文化というのを分けて進めている感じをちょっと受けるのですが、それって一つにつなげられたらつなげたほうがいいんじゃないかなと。古いものという意識を子供が持たないように、過去のものと思わないように、例えば、経政神社がありますよね。高砂市に。経政とい

う人は琵琶の名手で、そしたらその日本でその伝統文化として守ってこられて、今ジャズなんかと琵琶をコラボしたり、いろいろな画期的なことをされていますけど、その琵琶のフェスティバルをやるとかコンクールやるとか、何か現代とつなげていけるようなやり方すると、子供たちはその高砂市ってそういう伝統があるんだということに誇りを持ってくれるかなと思っています。そんなようないろいろなアイデアもよろしくお願ひしたいと思っています。

○都倉達殊市長

今のお話で、高砂学という取組もやっているのですが、やはりただやっているだけでは多分子供たち興味を持っていただかないと始まらないです。何事もそうなんです。やはり興味を持ってもらって子供たちがこれ面白いという中において、一つの学びとして吸収してもらえを進めていく、継続していくということが大事だと思っています。謡曲「高砂」に関してもそうなんですけど、なぜそれをうたわなければいけないのということになると、何も吸収できないですね。やはりそれには何が関連しているか、何をするためにやるかということも含めて、やはり教えていくということが大事かなと思っています。

ほかに何かありましたら。

○布施隆志教育委員

私、もともと出身が高砂じゃないので、外から来て、どっちかという会社入ってから転勤族、企業の技術屋として国内、海外ずっと回ってきたのですが、最終的に落ち着いたところが高砂に落ち着いたのです。というのはやはり、高砂の良さというのをつくづく認識して分かっているからだと思うのです。それはその伝統文化というのもあるのですが、人柄とか人と人とのつながりというのが非常にいい場所であると。もちろん東京にも住んでいましたし九州にも住んでいましたし、いろいろなところに住んでいましたけれども、ここまで無償の愛というか、もうやってやったぞじゃなくて、もう自然にやってもらったりして本当に非常に優しくしてもらえたという関連性があるので、そういうところは非常に伝統として高砂を生かしてもらいたい。ただ、じゃあ今、実際に高砂市の市長さんがいろいろと書いてある人口推移を見たときに、10年間で6,000人ぐらい人口が減ってきていて、年間で600人、これはもうリニアに下がっていますよね。特に子育て世代の人口減が目立っていて、じゃあ20代、30代の人たちがなぜ高砂に定着しないのかということは、やはり課題があると思うのです。課題の中で外から見た目で課題を考えたときに、私がまず思ったのは教育だと思ったのです。高砂市で本当に自分の子供を将来立派な社会人に、また活躍できる社会人にしたいといったときに選ぶかというところ。そこで目につけたのが、やっぱり学力のところ。学力をいかに向上させて、それでやっぱり高砂で勉強させたらいいね、もちろん幼児教育から始まると思うのです。そういうところをやはり充実させるために私はここに来たと思っています。私が教育委員になりたいと思ったのは、そこら辺を自分が課題と思ったところを改善させたい。そのためには何をやらたらいいのか。中に入って見てそれで改善すべきところを改善していこうというふうに思ったのです。そこで、今の教育、その学力向上、これからの未来につながる子供たちが何を必要とするかということを含めて、グローバル化というのがこれから非常に栄え立ってくる。それと、もうITというのはどんどん世界に回って行って、もちろん人口は減っていく。すなわち、そのことによってIoTだとかICTだとか、それからロボット、AI、その辺を使いこなさないといけない人材を育成しなきゃいけない。そのために、やっぱり興味を持ってもらわないと、今の日本の進め方は、やっぱりグローバル化とかIT化だとか、そういうふ

うなのに入力しようとしていますよね。実際に海外に私が住んでいて思ったのが、日本は非常に遅れていると思いました。日本は取組が遅い。スピードが遅い。そこで今やっとその辺が進めてきている中で、じゃあ高砂の立ち位置はどうか。立ち位置として全国、またこの地域の中でどうか。また、それを見ていって、そこでもっともっと、けつをたたいてでも進めなくてはいけない。そのためにはやっぱり予算がいる。予算に関して全世界で見ても、GDP値もその教育に与える予算としては日本は非常に小さいですね。これを見直さないといけないというのは常に思っています。だから、市長さんにはそこら辺をちょっと頑張ってもらいたいと思って、幼児教育の話が出たとおりに、私も子供2人育てたのですが、自分の反省点としてはやっぱり幼児教育がうまくやらなかった。何でと言ったら、やっぱり忙し過ぎて、私とこは2人とも共働きだったので子供を預けっ放し。誰かに頼りっ放しで教育ができなかったのです。それで、例えば読み聞かせをやっていた、もっともっと読み聞かせをやっていたら国語力がもっとついたらどうかな。やはり幼児教育の中でそういう読み聞かせの時間を充実させてもらうかどうか、ベースになるところをそこで充実させて、小中高とさらにそこを発展させていくと、人材的にはすばらしい人材がどんどん出てくる。そうすると、子供たちをここで生んで育てていって、世界に活躍できるような人材となってほしいという、我々外から来た人間というのは大体その辺を中心に考えますので、そういうことになると、今の高砂自身が昼間人口と夜間人口、それ見ても昼間人口が多くて夜間人口が少ない。これは基本的には大都市の傾向ですね。大都市は、働きに行くのは都市に働きに行って、寝るときには地方で寝るという、それが高砂の場合はこの兵庫県でも数少ない昼間人口と夜間人口逆転している。何でと言うと、そこを考えないといけない。そのためにやはり何を欲しているか。市民たち、国民たちが。そこでやはりその中の一つはやっぱり大きなところでは教育であると思っています。ということで、私はこれからはその学力向上を含めてICT教育も含めて、グローバル、英語教育も含めてどんどん推進させてもらいたいなと思っています。よろしくお願いします。

○都倉達殊市長

その点につきましては、私も商工会議所、9年間副会頭をしております、臨海部の大手企業の幹部の方々とも、いろいろな意見交換をする場がありましたので、布施委員が言われますように、まさにその高砂市の教育について言われている方も多数おられました。それで、やはり東のほう、神戸の方面にお住まいがあって、大学まで含めて向こうのほうがいいんだということで住居を設けられているという御意見もいただいておりました、ただ、これからの高砂市の教育の中で考えていかなきゃいけないのは、コロナを契機に企業側もちょっと変化をしてきているように聞いております。やはり通勤の問題であるとか、またこれだけ言われましたようにIT、IoTがこれから進む中においては、やはり子供だけではなく企業に置かれている方々の職場環境もこれからさま変わりしてくると思います。それと、東京、大阪とか名古屋とか向こうにおられる方々がこちらへやはり居住しようかというようなことも考えている方もこれから増えてくる。それを今、地方のほうではどういうふうに取り組むかということを進めていまして、当市においても4月からシティプロモーションを強化していこうということで部署を作りまして、これから進めていきます。その中においては、やはりこの高砂市というところがいかに安全・安心な町で、それとお話にもありましたように、人との交わりの中ですごい、いい人間関係が作れるとか、やはり魅力の発信をどういうふうな方々に広く伝えていくかという作業をこれからやっていこうと思っています。それと、大事なのはやはり幼児教育から含めて社会に出るまでの子供たちの成長に合わせた教育環境を作っていくということが大前提にあると思っています。そういう中で、また神尾委員さんの

ほうからも、教育現場の経験がおありなので。

○神尾信作教育委員

一言だけ、先ほど幼児教育とか、ふるさとの件について自分の体験談とかを話さなければいけないという感じなので、僕も実は岡山の人間でしてこちらの人間ではないのですね。今は高砂に骨をうずめる気でおります。ただ、そのいきさつは布施委員さんとは全然また違って、私のような者もいるというようなお話なのですけれども、私はたまたま就職が高砂市内の教職員ということで採用されたのでこちらにやってきました。希望している一つにはあったわけですが、第一希望についてはもちろん岡山のほうでしたので岡山を望んでおったのですが、残念ながらそちらとは縁がなくこちらに来たというのがきっかけになったのですが、そのままずっとこちらにおりまして、田舎に帰らなければいけないという長男でしたので、こんなこと言ってもしやあないのですが、そういう思いもあったのですが、なかなかそれもうまくいなくて、今は高砂が非常に気に入っています。自分、子供3人いますが、2人は高砂市内に住んでいます。というところで、自分の子供も好きなんだと思います、自分が何がいいかというと、やっぱり自然がいいのですね。やっぱり。小さいのですけども、そのコンパクトで山があり海があり川があり、そういう自然風靡、あと何回も出ている人との交流、特別都会ではなく田舎ではなく、確かに中途半端かもしれないけど、その中途半端の良さというのがここにはあるなという思いがあるのですね。ですから、人それぞれに、高砂に住みたい、いや、高砂出ていくということは、先ほど布施委員おっしゃったような教育の面もたくさんあります。それ以外にいろいろな要素が絡み合っていく中で、ここに住んだり出て行ったり、当然出ていくのも、出ていきたくないけれども仕方なしということも結構あると思うんですよね。自分の教え子たちもそうですけども、そういう子供たちもたくさん見てきています。逆に、まだこっちおんねんという教え子たちもたくさん見てきています。ですから、いろいろな先ほどもグローバルという話がありましたけども、本当にいろいろなところから高砂の良さをアピールしてこちらに行ってみたいな、ここにやっぱりおりたいなという思いをじわじわじわじわ浸透させていくという、十分ここには僕は魅力的なものがいっぱいあるなというふうに感じていますので、それをうまくハッチングしたり、吸収できたりしたらいいものができるかなと思っております。

○衣笠好一教育長

魅力確かにありますよね。今日お昼に企業の方と話していて、今市長がおっしゃった、コロナで工場見学に来ていただけない、でも、企業さんもそれで終わりではなくて、今ちょっと考えているのですと言って、出前するというか、企業のほうが学校に出ていくこともできるので、それを今検討中です。そういう形で教育をさせてもらいたいと、すごいありがたいお話をいただいて、また打ち合わせをしましょうと話をしたのです。そういう本当に海岸部にあれだけの立派な企業がたくさんあって連携できるという条件もあるし、幼児教育の話もそうですし、それも昨日知ったのですが、幼児教育の教科書というか、大学の幼児教育を目指している人の教科書として、高砂のそのお話、それぞれの地域の紙芝居というか、絵本になるようなの作っていますよね。そのお話を吉田先生が作詞・作曲して、曲もつけて歌にしている。それを幼児教育に携わろうとしている学生さんの教科書で使いたいのだと、大学の先生が言っていて、1冊の教科書ができたという話も、そういうふうなことを考えると、今市長さんおっしゃったように、魅力がいっぱいある、それをやっぱり発信していくということが今後やっぱり大事なかなというふうなことをすごく感じながら今、お話を聞かせていただきました。

○都倉達殊市長
ほか。

○神尾信作教育委員

それでは、教育のことですが、今私が思っている、感じている課題というのは、いわゆる喫緊の課題といますか直前の課題と、あともう一つは来年度以降というかちょっと長いスパンのことと二つ思っています。

まず一つの、喫緊の課題ということについては、つい先日、1週間前に神戸新聞から出ていましたけども新型コロナ、先ほどのコロナの騒ぎですが、コロナ感染が不安で県内小中252人が登校できずと。高砂市内の小学校1人いると。専門家が支援体制を整備を、というような話、ちょうど1週間前にやっておりました。全くそうだろうなと思います。その対策についてもここに新聞にあるとおりに思うのですが、これは要するに学校に来れない、6月、7月で。ですが、多くの生徒たちは来ているわけで、今僕が気になっているのは、意外に見えているようで見えていない、その学校には来ているのだけでも欠席。ちょっと登校渋りであったりとか、早引きと後、遅刻ね。この辺のところのケアをしっかりとしないといけないのだろうな。そっちのほうをはるかに数が多くて、そこをしっかりとチェックしないといけない。ただ、そのチェックするというのは、現場じゃあ何を使ってチェックしているかということ、結局その日の様子とか表情を見てするのですよね。ところが今、このマスクで表情が見えない。結構大きなマスクで目だけ、目がよっぽどトロンとしているというのは、かなりもう時間的に遅いので、なかなかチェックしにくい。こういう中で、そういう子供たちにも心のケアをどうするか。一生懸命頑張ってきているのだけでも遅刻組が、7時間授業があるときに6時間目終わったら帰ってしまう。早退してしまう。そういう子供たちがやっぱり出てきているというのは聞いておりますので、そここのところのケアをどう具体的にするかというのがまず一つの喫緊の課題。当然現場では一生懸命やってくれているのも感じています。ただ、今まで経験していないことを今やっているわけですから、これなかなか現場の教師にすると本当に大変。この暑さの中もあるしというところで、幾つかの例えば、中学校も小学校もそうですが、面談を増やす。要は、学級担任がその声を聞いて態度を見て、そういう接する時間。面談ですよね。そういう時間を増やすとか。しょっちゅう面談はできない。授業もしなければいけない。そうするとやっぱりアンケートをたくさんするとか、後、教師集団での情報交換の時間を作るとか、保護者との連携をすることとか、あともう一つ、地域の連携で言えば、登校指導、見守り安全帯の方がどの地区にもいらっしやいますから、そういう人たちから情報を集めるとか、いろいろなルート、ルートを使って子供の様子をしっかりと見るといえるところかなと。子供たちにすると、授業がやっぱり優先されていますので、つい先日も中学校の修学旅行がなくなりましたという。小学校はまだみたいですけども、そんなに大きな修学旅行までなくなってしまうんだ。となるともう、いわゆる文化祭、体育大会も縮小、合唱コンクールはやっぱりやりにくいとか。いろいろなことがあって、そういうところに、自己顕示欲を発散して、特に中学生なんか多いんですよね。勉強はあかんけど走ったら、泳いだらいけるで、という子はたくさんいますので、そういう子供たちは本当に心のケアをしてあげないと、それこそ先ほど楽しかった、いい思いをしたというお話がありましたけども、そのいい思いをする部分がどんどん削られているような気もいたしますので、それが一つ気になっている、喫緊、身近な課題だと思っています。

もう一つですが、これをもう少し長い目を見たときに、一つ御紹介したいデータがあります。昨年度の中学校長会、毎年やっているのですが、中学校長会のアンケートなのですが、学校長に学校経営上の問題点、課題は何ですか。ランダムにずっとありまして、

複数回答オーケーなのですが、中学校長ですが、第1位に挙げているのは教職員に関すること。これが71%。全体の71%が教職員に関することで課題を持っている。課題の思いを持っている。具体的には、勤務時間と資質能力向上。2番目の課題が、教育課程に関することが63%です。具体的には授業時間の確保、これは昨年度ですからコロナ騒ぎはまだ入っていません。ですから、今はもっとこれは重要になってきていますが、あと授業改善。これは学力向上につながっていくと思いますが、これが合わせて63%です。3番目が部活動なのですね。部活動に関することは45%、これは何かといいますが、具体的には専門性と専門的に教える者がいない。あと、顧問の不足、生徒数とともに部活動の担当する教師数も減ってきていますので、そういうことを挙げているのですが、これを見たときに私が現役の頃とそんなに変わっていない傾向なのですけども、一番やっぱり大切なのはやっぱり人材の確保、それも質と量、先ほど布施委員からもありましたけども、お金に関わることになってしまうのですけども、やっぱりどんだけ質と量、人材を現場に供給できるかというところで、当然本市では給食やっただき、空調もやっただき、本当はかなりたくさんさんの学校、教育のほうに注いでいただいているのはもう重々知りながら申しているわけですが、教師の人材については、入ってきてその現場で育てるとしましても、数ですね。量ですね。ついては市のほうの予算で充当できるところもかなりあると思うのですよね。そういうところで、それは子供たちの成長、一番の課題である教師の勤務時間のことにもかかってくることで、それで何とかまたそのフォローをちょっと御意見いただいでいて、また予算編成とかあるときにはまたいろいろ教育委員会のほうから市のほうでこういう人、例えばICT支援員だとかスクールアシスタントとか、そのいろいろな事務の補助をする人とかいろいろな場面のところで御尽力いただいでいることは知ってはいるのですが、現場からの様子がまだあるかと思しますので、そういうところをまたしていただけたらと思っております。

以上です。

○都倉達殊市長

今の御意見の中で衣笠教育長、今の御質問というか教育現場の話、何か回答が。

○衣笠好一教育長

すごい勉強されているなと思って。メモさせてもらいました。確かに今、神尾委員さん言われたように、先生方の資質向上というのは、これはすごく大事なことだと思います。若い方がどんどん増えてきて、若いから駄目だということじゃなくて、若い方でもいいところはたくさん持っておられるので、それを生かすような形で経験豊富なベテランの先生がその方を生かして、より子供と触れ合う時間を確保したりしながら、育てていくというのが今、大きな教育的なところにとっては課題になっています。その中で今、神尾委員さんおっしゃったその加配教員といいますかね。その勤務時間の適正化ということを考えて、やっぱり人を市費でも配置していただくというのは、確かにありがたい話ですが、両方大事というか、経験大事ですので、保護者の対応であるとか授業力をアップするとかいうのは、あまり甘えてしまうと伸びない。新任の先生がかなり地域の厳しい保護者の方の訴えに答えられていくような苦勞をされた先生というのは伸びていくというか、親の思いも受け止めて。優しい感じでほんわか包んでくれるところの先生はやっぱり伸びないということもあるので、だからといってゆったりとしたことが駄目だと言っているんじゃないかと、そういうことを考えるとやっぱり教師の資質能力を高めていくということで、人的なこと両方大事かなというのをまず思いました。それから、後の教育課程の時間確保とかそういうことも授業改善、高砂市も授業改善ということで

今、学力の話も出ましたけど、学力の向上会議の中で一方的に先生が教え込むということじゃなくて、子供たちがよく言われている自主的、対話的に深い学びを進めていけるような授業をしっかりと改善していく。これは今、高砂市の中でも取り組んで、もう2年、3年目になりますね。そういうことをやっていただいているので、その授業のこと、やっぱり何と言っても先生が子供たちと接するというのは授業の中での接する時間が一番多いですので、そういった授業改善というのは大きな課題でありますし、部活動にしても顧問が不足しているし、先生方のその勤務時間のことを考えたら大きな課題でもあるので、部活動を今後どうしていくのか。社会教育の部分で担っていくのか。それとも顧問を確保していくことに焦点を当ててやっていくのかということとは、今ちょうど過渡期といいますか、悩むところではありますけども、やっぱり先生方せっかく頑張っていていただいていますので、そういったことの支援は必要なのかなというふうに思っています。

○山名克典教育委員

その教員の先生、ちょうど今日新聞に載っていたと思うのですが、大学が結局コロナで一個も授業をやっていないから、今特に教員の育成に関して自習ができないから、来年度の教員採用のときに去年の経験がどれだけ経験不足になると、まさに新人教員のいわゆる、資質に問題に関わってくるということで、それをどうするかということをやったり問題になっているということはあるんですけど、最初コロナのときに休校に入ったときに、いわゆるすごく言ったのが子供の心のケアをしなきゃならないということで、実際に教職員に関して結局、いわゆるその学級、学校が休んでいる間にどれだけいわゆる訪問にせよポスティングにせよ、結局電話にせよ、いろいろなことで接触してどうするのだという、それをどれだけやれるかということをやったり検証しなきゃならない。どちみち絶対検証してやはり先生方のそれが、その資質だと思うのです。本当に子供のことを考えて一生懸命動く先生もおれば、良しとは思わないですよ。暇やからということだと思わないですけど、みんな一生懸命やられたということ聞いていますけど、それなりの出来、それは結局すごく僕検証しにくかったのは、結局その年度が替わってしまっていて結局何か中途半端な検証の仕方になって、それで新学期が始まって学級が閉鎖になって、でもそれではとてもじゃないがあかんということで先生方もすごく努力されたことはすごく理解して、やっぱりみんなやってくれるようになって、やってくれるようになって、実際にはやろうとしていたけど学年がもうすぐ終業式があったから、なかなかそこが動けなかったのだろうと思うけど、この新学期始まってからの新たに新学級始まる、学校再開までの間は努力されたのを十分思っていますけども、その辺の検証がやっぱりもう一回きちんとやり直さな、検証しなきゃならないんじゃないか。それぞれで。いわゆる、今うまくいっていますということで終わってもあかんし、それで今もう一つ問題点として将来の危惧しているのは、結局今度の分でいわゆるタブレットを渡してくれて皆さんもらうけど、タブレットが全てを解決する策じゃないし、それが増えれば増えるだけ、いわゆる大人でも大変なことになるので、それに時間を割くようなことになれば、やはり人間的にすごく弊害を伴ってくるかと。いわゆるICT、それなりの実生活、実際の体験する中で文字を書くあるいは作業をすること、そうゆうのがなくて、それなりのテレワークでいいのかもわかりませんが、子供にとっては1日のうちのそのテレワーク的な、ITを使っての勉強の仕方、それをすることによって実体験として成功感覚とか、いわゆる体験を実感できるかどうか。それを必ずさせてあげないと、子供の発育に関してはデジタルなそんな感じだけでいって、確かにいろいろなプログラミングして結局できたということはあったとしても、子供にとって実体験としてそれが経験として体の中に覚えていけるような形、いわゆる残っていくとしたら、具体的な形

としてのものを触って、いろいろなことをどこか行ったりとか、今言ったように修学旅行がなくなってもかわいそうだし、そういういろいろなことを経験したそれなりの体験というものがやっぱり必ず絶対教育の中で大部分を占めなきゃならないので、IT化、いわゆるテレワーク、いろいろなことできたとしても、やっぱり大事なのは学校の中で一緒にみんなと友達と、人と人と体を接しながら、今はあかんけど結局体を触れ合いながら、やはりそれを体験していくことが大事なので、そこをやっぱり重視しとってもらわないとあかんのかなと思います。何もタブレットそれなりの双方向の勉強ができるかどうかなのかといったら、それでは全てが終わらないので、これはやっぱりそれなりの範囲内で抑えた形の仕方にしないと、もっと大きくなったら別でしょうけれども、それは個人差があるからね。学校内の高砂市内の小中のなかでは、それなりの実体験をいかに時間を割いてでも今の状態でも感染がないような状態だったら、今学校行っていますけど、できるだけもう本当に走っていろいろ体を動かして、みんなで実体験、経験していくようなことはやっぱりすごく大事だと思います。行く行くもこれは絶対大事なことやと思っております。

○都倉達殊市長

先ほどのタブレットの、1人1台の支給に関しましては、今、国の考えているGIGAスクール構想にのっかってスタートしてしまして、コロナ第1波のときに、自宅待機になったがゆえに始まる授業ではなくて、やはり国の構想としての中において、これから始まるGIGAスクール構想という中においては、やはり教育現場、それと子供たちのこれからの取組の仕方が大変重要になってくると思っています。その進め方についてはまた教育委員会のほうから御説明もしていただいて、私も大変重要視する、次のテーマとしてこれお話ししたいなと思っています。というのはやはり、山名委員も言われていましたように、ただ与えるだけでは駄目なんですね。これから初めにもお話ししましたように、子供たちが社会に出ていくときには当然今のITの環境がもっと進んでいきます。その中で、やはり今からの子供たちが社会に出てもやはり通用するような教育現場を、グローバルな世界の中でも通用するようなことを国が考えているとは思いますが、各小中のなかで、当然高校でもやっていますけど、そういうITの世界をやはりきちっと、目的の説明をした中で教えていく。それが大事だと思います。これからまた進め方については教育委員会のほうで御説明をしていただいた中で、ちょっと議論をしていただきたいなと思っています。

教育長か誰か、GIGAスクール構想、何か。

○衣笠好一教育長

今、山名先生、市長さんからもお話がありましたように、ICTの環境を整えるところが目的ではなくて、そこからやっぱりそれを効果的に使う、教師が使う、子供が使う、そういったことがしっかりとなされなければ、幾ら環境を整えても駄目ですので、市長さんおっしゃったように、そのグローバルな社会でもそういう力をつけていくということで、そのGIGAスクール構想のほうは打ち出されているのはあるので、そこはやっぱり教師の指導力もありますし、子供にいかにもその意欲を持ってそういうものを使っていくか。それもマイナスの面もありますので、それを理解した上でしっかりと正しく使っていくということがやっぱり求められているというふうに思っていますので、そこは今も教師の研修を進めていますけど、今後さらに研修等を進めながらやっていきたいというふうに考えています。

○都倉達殊市長

教育現場のほうではやはり、それをサポートする人材も入れて何年かやっていくように計画もしております、やはり教員の方々だけではなかなか初めスタートしていくのに不安もあるし、子供たちも不安もあるし、やはりそういう中で全てそれは完璧かどうかわかりませんが、そういうような整備も進めております。やはりまだ始まってはおりませんが、このタブレット教育の中においては、やはりこれから子供たちに求められるのは、今までの教育は駄目ではなくて、やはりこれから将来に必要な知識、それと思考力とか、いろいろな発想力を持っていただくための教育だと私も思っています。そういう中で、やはり検証もしながらこれから毎年検証できるかどうか分かりませんが、3年ぐらいのスパンでもやはりそのプログラミングよっての教育の在り方、そういったものもやはり必要ではないかなと思っておりますけど、いかがでしょうか。

どうぞ。布施委員。

○布施隆志教育委員

ICT教育は本当に先生たちと生徒たちが一緒になってやっていかなきゃならない教育だと思うのです。先生たちももう年齢的には30から60代の人たちが多いので、その人たちが、じゃあITをはいやってくれといってもできるものじゃない。そのためにはいろいろなところからの支援を受けながら、サポートを受けながら先生たちも一緒になって勉強しながら、それを使いこなしながら生徒たちと一緒に取り組んでいくというふうになると思うのです。そのためには、やはり支援してもらえるためのお金が必要だと思うのです。市長さんのホームページみたいなのをいろいろ読ませてもらっているのですが、その中で財政力指数という言葉があって、「高砂市にはお金はないのですか。あるのですか。」というところで、高砂市はその表の中では県内で4番目に財政力がある。十分に財政力があるのですというふうな書き方をされていたのですが、もしそれが本当であれば、そちらのほうに先生たちがよりよい教育をしてもらえるためのお金をもっと投資してもらいたい。実際ICT教育をやろうやろうと言ってもう数年前から始めているのですが、高砂の取組というのはどうしてもビリのほうなのです。スタートしました。じゃあ、全体でどれだけのICT教育のそのツールを持っているかというときに、常に平均よりもかなり下のほうのレベルしかなくて、じゃあ何で準備しないんだ。やっぱりお金がないからというのがまず出てくるのですよ。じゃあ、ほかのところは準備しているところはお金があるからなのか。じゃあ、高砂はお金がないのです。だから、今回の第1波のコロナウイルスの問題のときに、早く準備してそれで学校に来なくても連絡取り合いながら、ICTを使いながらも少しでも教育ができないかということも試行錯誤、考えても結局は何もできなかったというのは事実。じゃあ、何で何もできなかったかという、やっぱりそれだけの資源がないというところで、じゃあその市長さん書いたであろう財政指数見たら、もしかして使えるお金があるんじゃないかと。だったら、将来の子供たちのためにもっともっと投資してもいいんじゃないか。それがつながるのは結果的には高砂市の繁栄につながるし、高砂市の人口を増やすためにはやはり子供たちをいかに多くこのまちに教育させるか。要は子育て世帯を増やすかということなので、そうすると企業はあります。でも住むところは加古川です、姫路ですだったら、明石ですといたら、落ちるお金も落ちなくなっちゃいますからね。そのために、使うところにはどんどん使っていく。神尾先生がおっしゃったように、お金が必要だというのは先生たちが言っているのですよね。それを真摯に受け止めて使えるところは使っていくかと思うのです。今の市長さんの話だったら、それは進めてもらえるのかという、今度の市長さんには期待していますので、ぜひお願いします。

○衣笠好一教育長

布施委員さんおっしゃったのは、そういうときもありますし、前の登市長さんも中学校、国のGIGAスクール構想では中1と小学生5、6年生、そこを高砂市は全中学生に配置、整備しましょうと、言ってくださったし、都倉市長さんも、それを全部整えてやりましょうと言って、今、環境整備にむけて動き始めていますので、あとは教師がそれを本当に効果的に使うという、ここはやっぱり現場に求められているところだけでも、そこだけはちょっと。

○吉田美香教育委員

私ちょっと今のお話からそれてしまうかもしれないのですが、実際にオンラインを使って大学院生に授業をしていて、非常に今、自分自身がどうしようと思っていることがあって、もしかしてこれ解決できたら高砂市先進的なところに行けるんじゃないかと思うのですけどね。そのオンライン授業をする前に、児童生徒たちと人間関係やいろいろなルール作りをしっかりとっておかないと成り立たないのですね。実際やってみると。大学院生だからいいのですけれども、やっぱり勝手に消える子って結構いるわけですよ。授業の途中で。ポッと消えてしまうとか、それとかスッと画面からいなくなって、トイレかなと思ったら戻ってこないとかいう、それを呼び戻す手段がないのです。だから、そういうところのルール作り。今は教室の中に全部入れてしまってやっていますからいいですけど、小さな子供たちが気ままに動き回りだしたときに最後に誰も残らないとかいう授業になりかねないなと思って、そここのところの始める前のルール作りであったり、人間関係のつくり方なんていうのをガチッとできるようなものを作れたら、これは非常に先進的なんじゃないかなと思いますので、またそんなところにももし御協力いただくようなことがありましたら、よろしく願いしたいと思います。

○都倉達殊市長

教育委員会のほうもそれは望んでいると思います。今、布施委員からもお話ありましたように、昔の高砂市の財政力、芦屋か高砂か言われた時代とは実際のところ財政力指数というのは選挙のときに私が出している数字でもありましたけど、インフラとかいろいろなところでのその財政的に今、高砂市の置かれている状況というものもございしますので、やはり今回この国が進めるGIGAスクール構想にのっとなって、将来の教育環境のための位置づけとして、これはやはり継続させていくということがまず大事だと思っています。やはり当然のことながらその時代背景の中で公共施設の削減とかいろいろなところで、もうほかにもやはりお金が必要となってきたお状況にありますので、その辺のバランスも含めながらやはり教育現場のこともやはりきちっと進めていきたいと考えておるところでございします。

タブレットに関しましても、いろいろな御意見いただいておりますけど、やはりまず大事なはこのスタートの時点である程度のそのマニュアルも作りながら、その中でまた方向性を作っていくということが大事だと思います。これが全てじゃなくてですね。いろいろなアドバイスも聞きながら現場のほうも慌てず、また子供たちがやはり安心してできるような教育環境を、教育委員会のほうでまた進めていただきたいと思います。

私も事前にちょっといろいろ今までの資料も見させていただく中で、一つ皆様に御意見もいただきたいのですが、全国学力・学習状況調査結果の報告書を見させていただいたときに、小中学校の平均の正解率とかいろいろな資料を作らせていただきました。そういう中で、小学校の算数、中学校の数学は、全国平均よりも少し高かったのですが、やはりどうしても国語、それから英語とか、全国平均を下回っている。そこにはやはり中間より上層の得点を取っている子供たちが少ない。やっぱり中間層の人たち

の中で、もう少しレベルを上げていくためには何が必要なのかなというのがちょっと気になったところでもあります。そういった点でまた御意見をいただきたいのと、やはり全ての子供さん、生徒さんがやはりどうしても個人差があるという中においての教育の進め方が、これからどうしたらいいのかなというところで御意見いただけましたら。

○神尾信作教育委員

私は国語担当でしたので、責任の意図を感じておりますが、今までも総合教育会議の中でもこの学力・学習状況調査の結果については何度も話題になっております。学力向上についても随分課題にはなってきていて、先ほどからもその話もありますし、ただ、何度か上向きであるなというところもあるのは事実だと思います。じゃあ、具体的にはどうやって学力向上するのかという話になるのですが、一長一短にできないのはもちろんそうなのですが、私が今までも同じような場面で同じようなことをお話させていただいているので、例えばこの大綱ですね。教育大綱の中で3ページに教育施策の重点テーマの重点テーマの1の説明文ですが、子供が「自分のよさ」に気づき、自己肯定感・自己有用感を高め、互いを尊重し認め合いながらという、この部分が学力向上のポイントだと思います。子供はよくいろいろなところで言われていますけども、日本の若者の自己有用感・自尊感情、非常に低いのですよね。OECDの調査で何回も出てきて、本当にびっくりするぐらい低いのですよね。自分にいいところがあるとか、自分が失敗してもまたやるぞという意欲があるとか、そこが非常に低いというのは大きな課題で、それは高くなればいじめ問題だとか、今よくやっているネットトラブルとか、そういうところの削減にもなるし、また学力向上にも下支えをするというか、この部分が時間がかかるようで実は非常に効果的な対策というか、工夫、努力目標だと思います。実際にそういうことを地域を挙げて学校はもちろんそうですが、地域、また保護者、地域みんなで子供を育てましょうということなのですが、そういうところでいろいろ子供たちのいいところをどんどん言ってあげる。お父さん、お母さんもそうだし、先ほど言った見守り隊のおじいちゃん、おばあちゃんも、今日も元気やねとかそういうことを言ってあげるとか、そういうところで子供たちが、自分が笑顔で行っているだけでいいんだとか、そういうことが思えるようなそういう部分がまずあって、その先に、先ほどから出ているまず一つは当然授業力だと思いますけども、後はもっと具体的に言いますと、調査によってやっぱり高砂市が劣っているのは家庭学習なのですね。家庭学習の時間がこれもうずっとこの始まって十何年たちますかね。ずっともう一貫して低いのですよ。ですから、ここはいわゆる伸びしろがあるところで、先ほど授業力は教師がどうこうじゃなくて、今までずっとやってきているのでその伸びしろがないという言い方は悪いかもしれませんが、どれだけ時間を与えるかというところと言えば、若手にどんどん力を注ぐ。ベテラン教師が若手にその教師の文化を伝えるという部分でのところはあるのかと思いますが、家庭学習に比べると伸びしろという意味では家庭学習に力を注いだらいいとか、あともう一つ僕がいつも思っているのは、学級担任の力を育てましょうと意外にやってなくて、今回のコロナ騒ぎの学級担任が先ほど山名委員のお話もありましたけど、学級担任がどれだけ熱意を持って動けるかという部分は非常に大きいのですよね。ですから、ここもかなり伸びしろがある。という部分で、学力向上については今、幾つか申しましたけども、その辺が具体的な部分も非常に抽象的な自尊感情というのは目に見えないものではありませんけども、本当に柱にしてやっていけばいろいろなところに波及していい効果があると僕は思っています。

以上です。

○布施隆志教育委員

私、学力向上について、やっぱりデータをいかにちゃんと解析して、それをいかに勉強のほうにつなげるかというのが、これまで不足していたというふうに痛感しています。今までの高砂市のやっていた結果をいろいろなデータで見たときに、A4の紙2枚ぐらいですかね、それで、できがどの程度だったということでもとめてあるのですが、じゃあ具体的にどういうところの問題が解けなくて、どういうところの問題が高砂市の子供たちは全国に比べて劣っているかとか、その解析がほとんどなされていなかった。要は表に出ていなかったというだけです。これ今年の2月にも、去年の2月か。作ったデータで平成25年から去年なかったのが平成31年までの全国学力・学習状況調査テスト、6年生と中学校3年生の結果をまとめた表なのですが、これはとりあえず今までも皆さんに何回か渡したことがあるのですが、それで解析していくと、やはり25年から29年まで一貫してもう高砂は平均よりも随分下。ほとんどの教科で。特に東播地区の中でも最も低いと言ってもいいでしょう。これが事実なんだけど、ただ表に出ている、家庭向けの冊子については、全国レベルよりもちょっと、大体同程度とか、その辺のこと、どっちかというとお茶を濁したような感じの言い方をされていて、これではやっぱり刺激にならないだろうということで、もっと解析データが欲しいということで、平成29年度からかな。明石のデータというのがあるのですよ。明石はこの東播地区の中では小学校のときには高砂とほとんど変わらないのだけでも、中学校においては平均点が3ポイント以上全ての教科で上なのです。何でこんなに向上するのか。いわゆる努力があるからだと思うのです。そこで教育委員会が作っている解析データってものすごい分量のデータを各教科で各単元のどういうところできていない、できているというのを解析したやつがあって、それを使って先生たちはもう一回指導し直すという、そういうふうな具体的なやり方をやっていて、まずはこれから始めましょうということなので、それで今、高砂はもう3年ぐらいたつかな。それでやり始めて、その結果かどうか分かりませんが、先生たちの刺激にはなっていると思うのです。それを見ることによって生徒たちも見ているかどうか分かりませんが、見たら、高砂はちょっとやばいな、頑張らなきゃなと思っている気持ちも出てきているかもしれない。そこで、30年、31年の結果というの、東播地区の中でもそんなに落ちてないです。加古川にも負けていないぐらいのレベルに上がってきています。そういうやっぱり解析のデータが持って、それで学力向上委員会を使ってどんどん先生たちにも刺激を与えて、この刺激が家庭ですね。家庭のほうやっぱり教育が足りないとか家庭学習が足りない。これもアンケートの結果を見ても明らかで、全国比べても圧倒的に家庭学習の量が少ない。それに何をやっているかという、家庭ではゲームをやっています。ビデオを見ている。テレビを見ている。そっちの時間をどんどん費やしているというのが分かる。そういうのをどんどん明らかにして、みんなに見せていって、自分たちの不足しているところは何かというのをどんどん見せていって、それで対策をとっていく。いろいろ調べた中で今、明石の話をしてしまいましたが、私が思う理想は、やはり小野です。小野市です。小野市というのは、非常に脳科学というところで、吉田委員のほうからいろいろ話を聞いて分かったのですが、やはり小さいときからもう家庭でも学校でもどこでもどこの先生でしたっけ。どこの大学の先生でした。

○吉田美香教育委員
東北大学。

○布施隆志教育委員
東北大学の先生と一体化してタイアップして、特化しているのです。それで学力を向上しようという、そこにみんなが家庭の人たちも含めていろいろな話を聞いて、子

供たちの教育について熱心なのです。その結果、学力向上と、これ後でお渡ししましょうか。データの的には小野市の小学校というのは全国で国語で言うとプラス3点。高砂から言うとプラス6点。おとしのデータですね。算数でもプラス1点、両方とも。中学校でも全国と比べてもプラス2点、国語・数学それぞれプラス2、プラス4なのです。高砂についてはもうプラス4、プラス3。何であんな小さな市が、高砂よりちょっと規模の小さいような、学習環境もそんなに整っているとは思えないところがこんなにかといくと、そこでの解析、教育委員会の分析結果で言うと、やっぱり自尊感情との心の成長というのが全国と比べて非常に高い。学習状況、学習づくり、授業づくり、それが非常に理解力が高い。学びに向かう力、家庭学習すごく良好だというのが、それが解析に書いてあるのです。こういうところをベンチマークして行ってどんどんやっていくと、高砂は何がほかに比べて、そういういいところに比べて落ちているのかというのを見ていけば、おのずからやるべきことが見えてくるので、こういうのを進めていったらということで、私も中学校の先生とかとも話をしましたし、もう既に教育委員会のほうでもこういうデータを作って渡しているのですけども、やはりこういう数値化したもので、目標というのをまず設定する。曖昧じゃなくて確実な数値化した目標を設定して、それに向かって取り組む。取り組むときにどういう過程を踏んで取り組むか。また、誰が責任を持ってやるかということも明確にして行って、これは結局企業でいうPDCAじゃないですか。そういうのを回していけば必ず学力向上につながると思うので、まず一番は家庭学習をもっともっとどんどん積極的にやらせるようにするという啓蒙活動ですね。それと先生たちがそういうデータをもとに授業をして、それで生徒たちがそれを受けて頑張るといって、そういうふうに戻させる必要があると思っています。去年までのデータしかないですけど、こういうふう考えております。

○山名克典教育委員

そのいろいろなデータあるのですけど、結局すごく大事なことは先ほどの幼児教育の中から最初に冒頭に言ったように、後からいっぱい言わなあかんことなのですけど、結局大事なのは小さいときからの、その子その子に対しての自尊心を育てて、接して行って、結局その子に自信を与えて、結局いろいろなものに対して興味を持つような教育をしていく。あらゆる家庭の中での教育というのはその時点から始まっていく。結局子供を育てるに当たって、叱る、できない、何でできないんじゃないかと、やはりできたことに対しての褒めて行って自尊心を持っていくような形。それといろいろなことに興味を持ったことに対して何でもさせていくというような形のそういう親の結局キャパシティー、いわゆるその親の容認度というのがやっぱり教育に関係してくる。だから、その子を育てるに当たっては、実際その親に全ての責任かぶせるのもかわいそうですから、結局その親に、ない物ねだりしてもしゃあない。結局そうしたときに地域の中でその子を育てていくために、要するに3歳児教育、その中でその子の素質というか、それなりのものを作り上げていこうと。いわゆるあらゆるものに対しての教育、いろいろなものに興味を持っていく。いろいろなことをしていったら達成感を持って行く。そういう体験をさせながらどんどんどんどんして行って、そうしたときに子供がいわゆる次から次への教育に物に対しての好奇心、いわゆる向学心というのはそこから出てくると思います。そういうふうなころから始まって行って、結局いろいろな学校からのいろいろなもの、目新しいもの、小学校入って中学校入って、結局勉強していったとき、その新しいものに対する興味を持っていくような、それなりの育て方をして行って、それを親に結局やってくださいという。やはり子供の教育環境と子供に対する教育の在り方と、もう一つ家庭教育の在り方に対して、親に対する教育というのが絶対出てくる。だから、そういうのをしていけない限りやっぱり駄目だろうと。それで、そうしたときに、子供子

供一人一人に対してはやっぱり個人に応じた能力に応じたやはり教育の仕方をしないと、今までの先ほど市長が言われたゆとり教育、それみんなよーいドン、手をつないで一斉にやはりゴールしましたというのではなくて、やっぱりそれぞれの個人に置いた形の、いわゆる発達障害があればそれなりの考え方、あるいはそれなりの中間層の子、あるいはそれなりにできる子に関しては結局能力を伸ばすための教育の仕方、教育長が言われたようにそれぞれの学校の中でできる子に関しては結局どんどん伸ばすような教育をいかにできるか。そこがやっぱりなかなか今の公立学校の中でできていないところがあると思うのですが、やっぱりそういうのをできる環境を作っていかなあかんし、それで中間層の子の能力を伸ばすためには、やはり自分が理解したかどうかをやっぱり人に教える、あるいはグループで勉強して何教育でしたっけ。それをやっぱりやっていって、復習にもなるから、そういう教育をして話し合っ、いわゆるできない子に対して教えていってあげるとい、そういう形でのボトムアップするような形というのがやっぱり大事であって、そういう勉強システム、結局子供個人に対する能力を向上するために、具体的な僕ら教育委員が言って現場に届くかどうかというのは、実はすごく悩んでいるところなので、事務局のほうから言っていただけるとは思うのですが、それを聞いたならそれなりのことを言ったらやっぱりそれなりに近いことはやってくれているのがあるのですが、そういうのをきちんとしていかないと、やはり1日1日ではなかなか学力の向上というのは得られないし、いわゆる極端な例で言ったら、東北地方の県のように、いわゆる学力テスト対策的な、勉強の仕方というのは、やっぱりあるのはあるのですよね。点数上げるかといったら、それ何の意味あるかということになるから、結局長い目で見るスパンで今言ったように幼児教育から始まった状態の中で、いかに根気よく充実したような教育をしていって、子供一人一人の自尊心、いわゆる自信を持って、結局子供一人が自立できたような形の子を育てていけば、多分おのずかとして教育のレベルが上がるでしょう。だったらそれはそれで、結局子供の教育に対しては、中学受験、あるいは高校受験、大学受験のそれなりのものの考え、それなりのことを考えた形の教育をこの市内の中で公立教育の中でどこまで必要かということがあるので、やはりそれ以後に結局もっとも大人になってから、結局すごく芽生えることもあるし、大化けすることもあるし、それなりの人となりの人を育てるといことだろうと思うから、それに伴う学力向上というのは、伴ってあげればいいでしょうが、それなりの努力はしようという気はありますけど、必ずしも今言ったように学力テスト対策教育するわけじゃないので、やはりそれなりの長い、いわゆる積み重ねのことがやっぱり大事だと思っているのですけどね。

○吉田美香教育委員

私はもう、一番の対策は家庭学習だと思っています。自分の子供とか周りの人の経験からも、やっぱり学校で習っただけでほっておいたら、絶対頭に入ってこないの、やっぱり帰ってから復習する。宿題をちゃんとするということが大事だと思うのですが、今は母子家庭非常に多いのですね。それと、母子家庭の中でも母一人子一人というお家結構います。そうすると、お母さんは子供を食べさせるためにお仕事かけ持ちで働いていらっしゃる。そんな中で子供の勉強を見るとか、とてもじゃないけど難しい方もたくさんいらっしゃるのです。もう、おばあちゃん、おじいちゃんに預けっ放しとか。そうなるとやっぱりそれを見てあげる人というのはやっぱり必要なんじゃないかなと。ですから、地域、市ぐるみでその子の学力向上にみんなで関わっていくような、親よりもやっぱり私たちの経験でおじいちゃん、おばあちゃんのほうが褒めながら気長に上手に教えます。親はあそこまで我慢できないと思うところまでゆっくり見ている、ちょっとできたらすごく褒めて、子供も目キラキラさせてうれしそうな顔をしながらやりますし、

そういうパワーというのもおかりできたらありがたいですし、またいとこのお兄ちゃん、お姉ちゃんに、年上の人に教えてもらうというのもすごくよく覚えるのですよ。中学生のお兄ちゃんに小学校低学年の子が教えてもらうとか。何かそのいろいろな形でみんな育てていかないと、いろいろな人が育てていろいろな人がちょっとずつ褒めるといいうことが、自尊感情非常に高めますし、親はどうしてもその足りないところばかり言ってしまって、ますます子供は100%自分で駄目な人間だ、みたいな思いを持ちかねないので、ですからやっぱり市を挙げて子供を育てて、学力を上げてあげようみたいな温かい何か環境があったらありがたいなと感じています。

○都倉達殊市長

私どもも家庭教育、それは大変重要だと思っています。福井県、また秋田については、そういう環境が多い家庭環境があるがゆえに常に上位を占めている県であると認識していきまして、ただ言われましたように、それぞれの家庭においてそれが全てできるかといったら大変難しい問題があつて。あれ、大阪のほうでしたっけ。学校もう放課後にある教室をそういう教室を開いて、子供たちを集めてやったりとか、そんな取組もしていることも聞いております。どこまでできるか市として分かりませんが、やはり学力向上というのは大変大きな問題ではあるのですが、やはり大事なのは子供たちがやはり勉強することに興味また楽しむといえますか、私自身そんなに小さいときから勉強してきたわけじゃないけど、やはり興味を持って切磋琢磨するような環境づくりをできたらいいかなと思っています。そういう意味では、いろいろな御意見本当に参考にさせていただきたいと思っています。

それでは、大分時間が経過してきましたので、続きまして、4月に組織改正を行う計画をしております、その点につきまして事務局、経営企画のほうから御説明をさせていただきたいと思っております。

○前田育司経営企画室長

それでは、資料のほうの8ページをお願いいたします。

令和3年度に組織改正を行う予定としておりますけれども、その組織改正の方針をお示ししております。

まず、4つの考え方がございます。1つ目は、第5次総合計画基本構想基本計画（案）を推進する組織としております。内容につきましては、1つ目としてシティプロモーションの推進で、移住定住を促進するため、シティプロモーションを行う組織を新たに設置するという事。そして、2つ目といたしまして、地域情報化の推進につきましては、スマートシティ化に向けた整備を推進するため、現在の情報政策課を発展させようとするものです。3つ目といたしまして、住宅政策の推進、これにつきましては、現在行っている空き家対策などに加えて、民間住宅の融資支援なども含めて考えております。4つ目といたしまして、地域社会の地域共生社会の包括的な支援の推進ということで、地域共生社会を推進していく中で、地域包括ケアシステムや8050問題などを決めていく組織を新たに設置することを考えております。

2つ目といたしまして、新庁舎窓口に合わせた組織では、住民市民窓口や保険の窓口等の大きな窓口の中で来庁者の利便性を考慮し、分かりやすく手続がスムーズな窓口を実現するための組織を見直すとしております。

3つ目といたしまして、政策部分を強化し、政策課題を総合的に推進する組織ですが、現在の経営企画室を初め、初めに言いました1の(2)の地域情報化を推進する組織、公共施設等総合管理計画を推進する組織、1の(2)のシティプロモーションを推進する組織をまとめまして、新たに部を設置して進めていきたいと考えております。

4つ目といたしまして、現行組織の懸案事項の課題解消ですが、1つ目として総合計画と総合戦略を統合いたしますので、未来戦略推進室の新たな形となる組織として、移住・定住の部分を政策部門のシティプロモーションを行う組織に移そうと考えております。（2）の公共施設等総合管理計画を推進する組織の設置は、新たに公共施設のマネジメントを行う組織を設置いたします。3つ目の市の施策を市内外へ効果的に伝えるための組織は、現在の広報部門をシティプロモーションの組織に、そして4つ目として観光行政を推進するための組織として、観光業務もシティプロモーションの組織と考えております。5つ目の治水事業の今後の取組に対する治水対策室の在り方検討ですが、治水対策事業は今後も工事のほうはございますが、一定のめどがたちましたので、上下水道部に統合することを考えております。6つ目として、職員の流動体制をとるため、選挙管理委員会事務局、農業委員会事務局職員と市長部局職員との兼任の検討ですが、人数の少ない行政委員会の今後の事務の継承、そして選挙時などの体制を考え、市長部局職員との兼務を考えております。

次に、教育委員会に関係する内容といたしまして、9ページをお願いいたします。

9ページに青少年センター及び青少年健全育成事務をまとめております。先日、勉強会で様々な貴重な御意見をお伺いいたしました。持ち帰らせていただきまして、検討のほうをさせていただきました。

まず、一つ目のところからですが、現在のこども未来部の所掌とした経緯でございます。平成29年度の組織改正では、子供・若者・女性・子育て世代を所管する組織としてこども未来部を設置いたしました。従来から体制や施策で弱かった若者部分を強化するために、青少年センターと青少年健全育成関係の事務を含めて市長部局で行うことといたしました。その成果として、子ども・子育て・若者支援計画の策定と若者支援や施策の新たな展開を図ることができたと考えております。

2つ目、今後の施策の方向性ですが、青少年の対象といたしまして、兵庫県の青少年愛護条例によりますと、18歳未満の方という形になります。そして、若者の対象といたしまして、高砂市の若者支援計画によりますと、15歳から39歳までと定義しております。これらをもとに就学から18歳未満の青少年施策については、児童生徒が対象であるため教育部のほうで行い、教育施策や若者施策については、市長部局で行います。そのように所掌する組織を分けることで、対象者に対してより必要となる施策を適切に行っていこうと考えております。

1つ目といたしまして、青少年センター・青少年健全育成関係でございます。青少年センター及び青少年健全育成に関しましては、対象となるのが児童生徒が中心であることから、小中学校を所掌する教育部において行うことが望まれます。また、青少協の地区の事務局については、多くの各小学校の教頭が行っているところがあり、また市子連の会員も市内小学生であるため、教育委員会とのつながりは大きいと考えております。青少年健全育成の内容ですけれども、1つ目といたしまして、青少年の保護育成に関すること。そして2つ目として、青少年関係団体に関すること。3つ目といたしまして、青少年の指導者育成に関することとなっております。

2つ目として、若者支援でございますが、ニートであるとかひきこもりの問題でございます。につきましては、長期的かつ継続的に支援する体制を構築する必要があるため、市長部局、福祉部のほうにおいて所掌することと考えております。

また、3つ目、若者活躍・成人式ですが、若者活躍、これは現在もやっておりますが高校・大学等との連携及び成人式につきましては、移住定住施策の推進にもつながるため、市長部局、政策部のほうにおいて所掌するということを考えております。

このような形で内容のほうを整理させていただきました。

○都倉達殊市長

ありがとうございます。これにつきまして何か御意見ございましたら。よろしいでしょうか。

○山名克典教育委員

市長が変わられて組織改正、自分なりの御意志があつてだと思つては、いわゆる組織改革、前のときも実際にあつたことも未来部の設置に関しては、子供の施策のいろいろなことの相談窓口が一本化できて、ワンストップでできればいい。そこにあらゆる専門家の方、専門というかそれに対応できる人たちをワンフロアに集めてやっていただきたいという、そういう形をやりましょうということだつたと思つては、それで、今回もそれなりの、先ほどの8ページのところで新庁舎窓口に合わせて組織ということ、分かりやすい来庁者の利便性を考慮し、分かりやすく手続がスムーズな窓口を実現するための組織ということで、それなりに考えられてしていただけるんですけども、一般市民として名称が変わっていくと、なかなか結局その部署は何だろうという形の分かりにくさ、また名前が変わつたなという感じで、いわゆるどの部が何をされているのか分かりにくいので、その辺のところをきちんとPR、啓蒙、広報していただけたらいいと思つては、そこだけが気にはなるんですけど、よろしくお願ひします。

○前田育司経営企画室長

組織改正のほうの決定がいたしましたら、できるだけ早い段階から市民の方、あるいは関係団体の方に来年の4月からこういう状態、組織のほうが変わりますということで、何度もお伝えしていくというようなことは必要かと。いろいろな媒体でお伝えしていくことが必要だと考えておりますので、その辺はしっかりさせていただきたいと思つてお願ひします。

○神尾信作教育委員

私の思ひですが、大前提として時代の流れとか世の中に沿つて組織を改めるといふことは、これは大切なことで、それはいいことだと思つては、今回の改正のタイミングとすれば、先ほど山名委員おっしゃつたように、市長、そんなこともありましようし、第5次総合計画が始まるだとか新庁舎が建つとかいろいろなタイミングから見て今回あつたのかなと勝手に憶測しているわけですが、ただ、危惧することとすれば、変更のための変更であつたりとか、改正指針、方針とありますが、これ結果改悪になつてはいけないうところ、危惧されます。組織として来庁者の利便性といふことがあるのですよ。やっぱり行政とすれば利便性とか効率性といふのは非常に重きを置く部分だと思つては、先日のその特別給付金でしたか。あれも何か全国的にもうどこの市が早く終わつてここは何%でここはまだやぞみたい、まさにこれが象徴的なことだと思つては、けれども、ただ、教育に関してはその利便性とか効率性を争うものではないといふ部分が多いのですよ。今回の資料で言うと9ページの若者支援のところ、長期的かつ継続的に支援する、2の(2)ですね。長期的かつ継続的に支援する体制、もちろん大事なことです、そこにこれもさっきからずっと言つては、そのいろいろな人が関わつて地域、市を挙げてといふ、要するに多角的とかいろいろな人が関わつてといふ部分は、もう全くこれはもう効率性とか利便性と相反するものなので、結局その部署部署によつてのやっぱり適正、必要性が違ふと思つては、そこをしっかりと吟味していただいて、改正方針を出していただければ、その部分だけは僕が危惧するところなので、教育、人間に対する、ここについてはちよつと同じ視点ではない、違ふ視点で見ていただけたらいいなと思つては、よろしくお願ひします。

○前田育司経営企画室長

継続的な支援のところですが、その部分につきましては、今後は市長部局の福祉部を通して若い方から、それからあと高齢者になってまでも一貫してその方をずっとサポートしていくと。その方がなかなか困窮状態から抜け出せない場合もやっぱり多くございますので、それをずっと若者で切るのではなくてというようなイメージで考えております。福祉の部分についてはおっしゃるとおりで、なかなか効率的にというものはもう相反するものやと考えておりますので、そこにはやっぱり当然時間もかかります。人手もかかってくるということは十分に認識した上で対応していきたいと。

○衣笠好一教育長

ありがとうございます。ここに書いてある今後の施策の方向性の中に書かれていること、青少年を対象にした施策、それから若者を対象にした施策ということで、特に青少年センターの役割というのは、これまでもこども未来部さんと教育委員会連携して教育の推進ということでやっていたのですが、今後はそれを教育部が所管することによって一体となってやる、対応できるという面では、例えば問題行動が起きたときとか、いじめの問題であるとかいうのは今まではこども未来部さんの未来戦略の中の取組として連携はしていくという形でしたが、一体となってやることによってある程度スピード感を持った対応ができるというのはよく理解できます。ただ、今、神尾委員さんおっしゃったように、若者支援・若者活躍の部分については、やはり長期的・継続的にここに書かれていますように、これもやっぱりそれぞれの福祉部または政策部にお任せするんじゃないなくて、教育委員会、教育部としてもしっかりとその将来、若者、幼児期から就学のときから18歳、それからの若者と言われている39歳までを見据えた形で連携協力をさらに強化して取り組んでいくということを、しっかりと教育としても心に留めて取り組んでいきたいというふうに思っていますので、よろしくお願いします。

○布施隆志教育委員

私は今、教育長さんが言われたように、縦割りというのがどうしても弊害的に起こるのではないかと危惧するところもあるのですが、そうではなくて、やはり連携できるところは連携していくというのはやっぱり、市全体として取り組みということで進めていければ、組織改正した後もうまくいけるんじゃないかと思うので、その縦割りというのは、そういうのはもう外して、本当に横との連携をうまく進めながら、担当部署としてはやってもらいたいと思っておるので、よろしくお願いします。

○都倉達殊市長

これは全体の組織改正も伴ってしまっていて、私自身、高砂市66年目の市政運営の中で初めて民間から来た市長ということもありますし、また新庁舎が今度建設が終了しまして、新しくその窓口もワンストップでできるようにということで進めようとしています。また、この教育環境についても、確かに以前、こういう形でこども未来部という形の中で進めて来ていた経緯も私も承知はしておりますけど、やはりまた違う形でのこれから高砂市のいろいろな意味で将来に向けて進めていきたいと考えておりますので、どうぞまた御理解のほどよろしくお願い申し上げます。

それでは最後に、青年の家を含む向島公園の活用についてということで、事務局より。

○松本匡茂経営企画室参事

経営企画室参事でございます。

向島のエリアの今後の考え方について説明させていただきます。

公共施設等総合管理計画での向島エリアの今後の考え方について、資料の10ページ、そこではスケジュールをお示ししております。向島エリアにおいては現在、市有施設であります向島公園、向島球場、青年の家と、県の所有します海浜公園の4施設がございますが、各施設ばらばらで指定管理や業務委託によって現在維持管理されている状態です。平成30年度の時点においては、4施設のうちの市有施設であります向島公園、向島球場、青年の家の3施設を令和4年度から一体化にして運営を行うとともに、収益事業を含めたPPPの導入検討を行い、令和9年度にはさらに県所有の海浜公園を含めPPPの導入により運用していく予定でしたが、令和元年度に取りまとめました先導的官民連携業務委託報告書や、今年度策定しております公共施設全体最適化計画に合わせて見直しを行い、実施方針として取りまとめることとしております。

見直しのスケジュールについてですが、10ページの下段に示しておりますとおり、令和2年、3年度にPPP導入検討を行いまして、令和9年度からのPPP方式による4施設一体化運用を前倒しして、令和4年度より実施していきたいと考えております。

事業の実施に向けては、11ページにお示ししておりますとおり、その3つの課題がありまして、教育委員会関連としては2項目ありますが、1つ目の青年の家の今後の活用方針の検討がございます。青年の家を今後維持していくとなると、令和4年度以降に施設の老朽化による大規模な修繕が必要となり、試算では令和9年度までに2億8,000万円の修繕工事費が必要となります。また、12ページの表ですが、そこにお示ししておりますとおり、青年の家の関連として3事業、年間にして約2,000万円の経費もかかってきます。現在の市の財政面や青年の家の現在の稼働率、あとバリアフリー面などを考慮いたしますと、今後の青年の家の在り方などの検討が必要ではないかと考えております。

2つ目の課題といたしましては、3番に行きまして、民間事業者の提案の具体化、事業の展開可能性の検証がございます。この対策といたしまして、11月から12月の間の一定期間に市場性の把握、事業者側の公益性やニーズの把握、また市民ニーズの把握などを目的にトライアル・サウンディングを行う予定で、事業者の公募を行い、暫定的に青年の家も含めた公園施設を利用して収益事業を行ってまいります。トライアル・サウンディングの終了後には、実施報告を提出していただきまして、報告の結果により、今後の青年の家の必要性の確認や、また青年の家施策の代替となる新たな青少年施策の発案を期待できるのではないかと考えております。

以上、説明しましたこれより、今年度策定しております、最適化計画に反映していきたいと思っておりますので、サウンディング結果も参考にいただきまして、教育委員会内での今後の青年の家の社会教育施設というものの在り方などの方向性を検討していただきますようよろしくお願いいたします。

○都倉達殊市長

何か御意見ございましたら。

○山名克典教育委員

僕、個人的な話、懸念があって、結局向島公園の立地条件が非常にハザードマップ上、非常に怖いという形を常に持っていて、今の状況でも結局何かあったとき、この前も聞いたら南海トラフがあったとしても津波が来るのに2時間かかるから逃げられるという意見をお伺いしましたけども、結局はあそこの中でいわゆる出入り口が1本しかないということがあって、非常に何かあったときあそこで宿泊していて何かあったときに設置者としてそれなりの逃げ道というか避難路を確保できてなかったときに問題がない

のかなというのが常に思うので、いつも実際には花火のときには非常に大変な、ピストン運転しているバスを出したりとか、警察にしても聞くところによると非常に警備しにくいというふうなことがあって、結局ああいうところでのそういうイベントやることに關しての、場所的にイベントというよりもその場所があそこが非常に、ふだんのときに使うのはいいとは思いますが、宿泊施設とかそういうのにおいて結局避難路が数本確保できていない限りはなかなかあそこを利用しにくいのかなと思うから、実際には次の策として結局避難路の、どういう道を通ったら逃げれるかという形のものがある、考えていたほうがいいんじゃないかなと思うので、あそこを有効利用するに当たってはね。やっぱりちょっと個人的には、まず高砂やったらあそこから始まるなと思っとるから怖いなと思って、あそこは逃げ道が1本しかないし、車が逃げるといったら本当に殺到するだろうし、大変なところだなと思うので、それを宿泊施設だったりすると微妙に怖い、怖いなと常にずっと思っている、何らかの避難所増設等を考えていただいて、有効利用を考えていただいたらいいと思いますけども。

○都倉達殊市長

何か事務局のほうから説明は。

○永井幹雄企画総務部長

企画総務部長です。

おっしゃるように、避難とか災害に対することというのを考えながら、先ほども申しましたトライアル・サウンディングをやっていきますので、活用する中で事業者とも当然そういったことも協議しながら避難経路の方法といったところも考えて活用を考えていきたいと考えております。

○神尾信作教育委員

僕も向島青年の家、好きな場所なのです。部活動で青年の家へ合宿でよく泊めさせていただいて、もちろんグラウンドがあってそこで軟式ならちょうどできるサイズですし、僕がまだ若い頃は、だだっ広い大きな場所やったのですが、それが今きれいになって、あと海浜公園のほうもいろいろきれいになって、もちろん砂浜があってトレーニングもできてというふうなところで、本当に好きな場所なのですが、稼働率は前回お聞きした15%と、これ年間の稼働率が15%は非常に低いのですが、今のこの時期だと夏休みになると結構大きな大会、今でもやっているのですよね。高校生の合宿が一緒になったりとかいうところで、いろいろ需要の価値が非常にあるところで、ただ、先ほども言った宿泊施設にするとちょっと老朽化、あと耐震性、津波の問題、立地条件等で厳しいので、やっぱり宿泊施設として使うのはちょっと厳しいのかな。ちょっと避けたほうがいいのかと思いますけども、ちょっとした展示場だとか、そういうものになったりとか言いながら、その日本の白砂青松100選の中に選ばれているのですよね。県下で6つしかないところの一つに選ばれている、そういう本当に風光明媚な名所だと思いますので、その辺をうまく活用しながら高砂を代表する一つのいい場所としてうまく活用していただけたらなと思います。

以上です。

○都倉達殊市長

ほかよろしいですか。

○吉田美香教育委員

私も子供たちは合宿で、私も体育館をよくピアノが置いてあるので、いろいろなことでよく使わせていただいていたので、すごくなるのは残念なのですが、ただ、ガチッとしたああいう建物を置いて宿泊するというのは、もうこれからの時代はあまりやらないことになるのではないかなと思いますね。これからはグランピングだとかキャンプだとか、そういうふうに変ってきているので、ですから、建物というのはいまもうしっかりしたものは要らないのかなという印象を持っています。

○都倉達殊市長

市としてはやはり、これからの向島公園の将来に向けての活用をこのような形でいろいろ意見を聞きながら、また委員の皆様にも御相談をさせていただくということで進めさせていただきます。

それでは、長時間にわたりまして貴重な御意見いろいろいただきましてありがとうございました。

それでは、高砂市総合教育会議をこれで終了させていただきたいと思います。

本日はどうもありがとうございました。